

白岡市長賞

消費税の過去と将来

白岡市立南中学校 三年

早 川 雄 人

一九八九（平成元）年に三%から始まった消費税。そして一九九七年に五%、二〇一四年に八%、二〇一九年には十%に税率が引き上げられてきました。消費税十%にも慣れてきたこの頃、私は一つの疑問を抱きました。

それは、なぜ昔は三%の消費税で国を回すことができていたのに、二十年経つうちになぜ十%まで税率を上げないといけなくなってしまったのかということです。この疑問を解決すべく、インターネットや本などを使つて調べてみることにしました。

時代を遡り一九七八年大平正芳首相は財政再建の必要性から一般消費税の導入を考えました。しかし、国民の反対に合い廃案となってしまいました。その十年後竹下登首相によつて消費税法が成立し、翌年の一九八九年から施行となりました。この導入には社会保障費の増大や税制の公平性確保という目的がありましたが当時の税率だと目的を達成するには十分ではなかつたと考えられているそうです。導入から三十年以上が経ち、消費税は日本の重要な財源として定着し、日本を豊かにしてきました。一方で景気に悪影響を与える可能性があるという指摘や低所得者の負担が大きいという課題もあります。

今現在、国会では消費税の減税や物価高対策について話し合っています。しかし、今後私は消費税が大幅に減税されることはないと考えています。日本は歳入の約二十%を消費税に頼っているので、もし減税されたとしても他の税金の税率が上がったり、新しい税が登場したりして低所得者の負担が大きいという根本的な問題が解決されないと思っています。消費税の税率が高いスウェーデンでは標準税率二十五%と非常に高いですが反発の意見が出ることが少ないそうです。なぜなら、税率が高い分、医療、福祉が充実していく恩恵を受けていることを国民が実感しているからだそうです。

これらのことから私は消費税を下げるのではなく、税とは別の財源を確保し、国民一人一人が税の使われ方を理解し、政府はできるだけ国民に還元するような形を採ればよりよい日本ができるのではないかと考えました。